

# 目をこらして



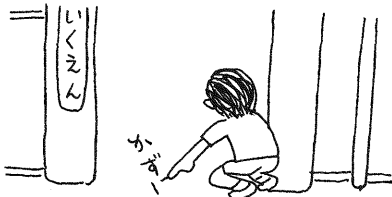
休みの土曜日。五歳になる娘が保育園を見に行こうと言いつ出した。友達が遊んでいるのをちょっと見てきたいのだと言う。

図書館に行くついでに、保育園の門まで行ってみる。中をのぞくと、ちょうどお昼ご飯の用意をしているところでみんなとても忙しそう。恥ずかしがり屋の娘が小さい声で「おーい」と呼んでも誰も気がつかない。

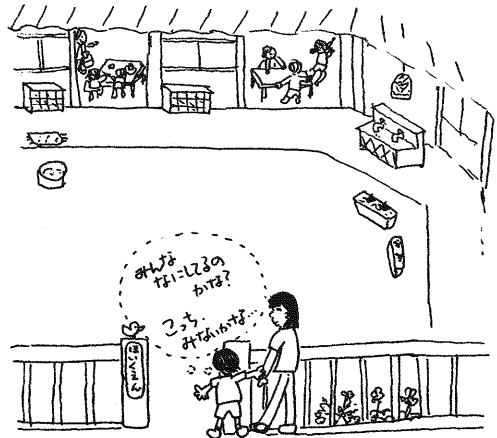
しばらくして「今忙しいのよ。もう行こう」と私が生をかけて、残念そうな顔をしていた娘が「ちょっと待って」と言った。そして門のところから少し中に入り

地面に指で（かずほ）と書いた。そして「もうちょっと早く来てみればよかったよね」と言いながら図書館へと駆け出していった。

地面に残った（かずほ）の文字。たぶん誰にも読まれることのないその文字には、私はここに来たのよという思いがしっかり込められている。その思いを文字に残したことで、娘は満足し駆け出していったように私には思えた。



門の近くの地面に、自分の名前をかく...

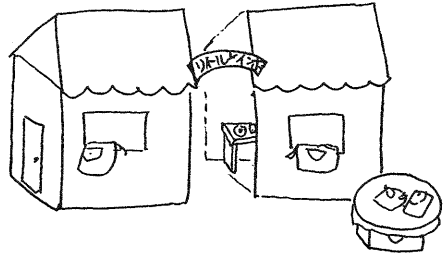


私はしばらく地面に残った文字を見つめていた。こんな風に、子どもたちはいろんな印を残しながら今を生きているのではないだろうかという思いが、ふいに浮かんできた。



# 耳をすまして

絵と文 / 宮里 曉美



自分の決めた場所に。  
自分の大切なエプロンを かけている。

子どもの残した文字から、子どもたちの残した遊び場から、いろいろな声が聞こえてくる。いろいろな思いが伝わってくる。子どもの情景が見えてくる。  
耳をすまして目をこらしてそっと触って匂いを嗅いで、そしてゆっくり考えてみたい。  
家庭と職場と両方で、子どもといえる生活をしながら……。

(目黒区立ふどう幼稚園)

子どもたちの帰った幼稚園（私の職場）の遊戯室で。ダンボールで作った大きなケーキ屋さんの家がある。その窓枠のところにエプロンが並んでかかっていた。明日もまたやるよ、この家の窓ガラスが一番のお気に入りなんだ、ステキでしょ、そんな声が聞こえてくるように思えた。  
そういえば……、とさっきまでの遊びの様子が浮かんできた。片づけの時、「私ここにする」「こっちにしよう」とエプロンを持っておしゃべりしていたっけ。

